

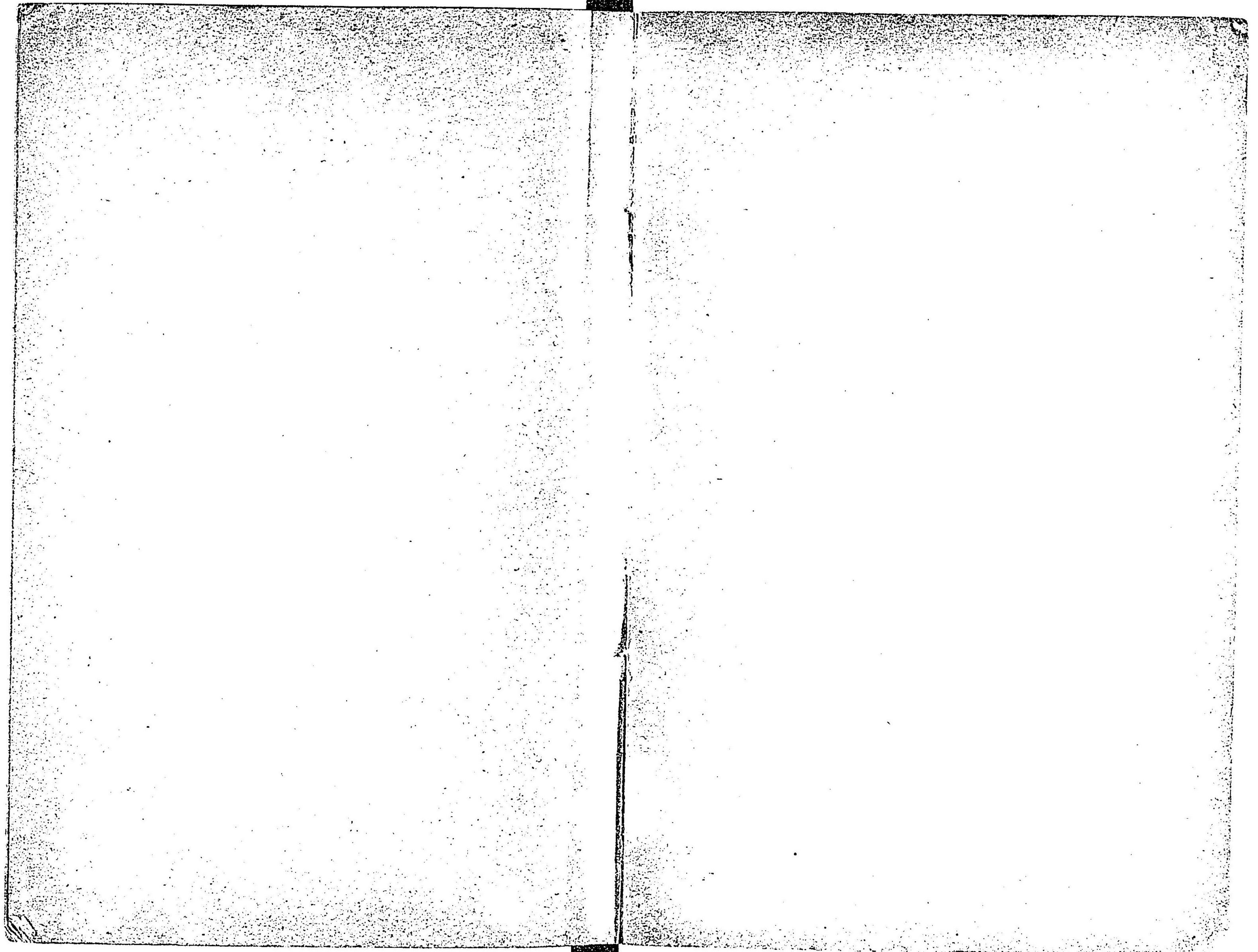
金

益

山
本
露
滴
著

1253

7/2



特22

98

金
盃

山
本
露
滴
著



特22

98

金盃

山本露滴著



序 序 序 序 序 序

文 歌 文 歌 文 歌

相 馬 御 風	金 子 藏 園	梅 澤 和 軒	尾 上 柴 舟	前 田 林 外	落 合 直 文
------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------

天地はわが身

ひとつの心地せむ

このさかつきを

ときに手にとれ

直

文

序

露滴君が石狩や十勝から屢々僕に寄せられた手紙には、どれでも特獨の趣味があつた。それで、こゝ數ヶ年間といふものは、僕は君の手紙を何よりの樂みにして讀んでゐたのであつた。しかし、これは君が別に骨を折つて、かやうに書かれたわけではあるまい。恐らくは、ゑぞが島の明さ、暗さ、響き、匂ひ杯が、すっかり君の心魂に染込んでゐるので、草卒の際筆を執られても「けふは灰色の雨雲が、涯のない廣い十勝野に

一杯垂れてゐるとか。あさは細い雨が降つたが、晩には強い風が吹いたとか。長い林が黒くなりかゝつたとか。積雪の密林がどうしたとか。といふやうに、北部大陸的趣味がおのづと筆端に溢れてきて、詩的になつたのであらうと思ふ。

が、君がゑぞが島を去られてからは、此の冷的氣韻に富んだ手紙は、又と僕の處へは來なくなつたので、僕はをりにはなんだか物足りない感じもした。

その後、僕はウチリーシチエ、イノストラニイフヤズイクフで露西亞語を研究してゐる。處が、教官か

ら教えられる、グランマチカや、ラズゴウオールには、殆ど曩に君よりの手紙で見たと同じやうな、北部大陸的趣味に充ちてゐるスローボが多いのである。例へば「雪車、橇。尾花栗毛の馬。家の窓には冬の窓枠を篋めん。沈黙、暗黒。積雪の深林。雪の湖、沼、池。流浪、漂泊。胡桃、榛の木。白楊、白樺。鳩羽鼠色の上着。」此等の語はペン先きと舌端にかゝらぬ日はないのである。で、流石に困難なる露西亞語も僕の趣味性を満足させる所がある故か、別に左程の苦痛とも思はないで學んでゐる。

そこで、僕はこう思つた。日本の今の詩界には、蒸し苦しい暖國的氣韻の詩には、別に不足を感じないやうであるが、冷的趣味のポエマーは欠けてゐるやうである。こんな冷的趣味に富んだ詩集の二ツや三ツは、ほしいものである。否、是非なくてはならないものであると。こう思つた。

この頃、突然露滴君から詩稿を送られたので、披いて見たら、僕がちかごろ不足に思つてゐた所の、北部大陸的趣味に富んでゐる詩歌が、七八分も占領してゐる好箇の詩集であつたので、僕は詩界の爲に頗る嬉しく思つた。

く思つた。

今は日記を持合はせてゐないから、一昨年であつたか、又は昨年であつたか、しかとわからぬが、なんでも秋の暮であつた。僕は裕に袷羽織で、尙聊か寒さを感じたやうに記憶してゐる。その節であつた、九段の靖國神社に、大祭禮が執行された。僕も參詣したところ、廣い馬場には、澤山小屋掛けが出来てゐて、劍舞、曲馬、猿芝居、犬相撲を始めとして、珍禽奇獸、大蛇異魚、形々色々、愈よ出で、愈よ怪。喇叭を吹く、大鼓を敲く、鐘を鳴らす、そして、その熱鬧雜踏とい

つたら、實に逆上する位であつた。僕は群集を押分けて、やう／＼参拜だけすまして、歸らうとすると、馬場の片隅に、尺八の音がするので、立ち寄つて見ると、穢い單衣に、帯は白へユのぐる／＼巻き。顔も形も、寢れはてたる四十歳前後の盲人が、寂しさうに立つてゐて、哀はれな冷い聲で、追分節を歌つては、尺八を吹いてゐるのである。

その歌つてゐる歌が、どうしたものか、どれも／＼ゑぞが島の民謡であるから、僕は深く不思議に思つた。

オシヨロ高島及びもないが、せめて歌葉磯谷ま

で。

浪は高いし風さへ吹くよ、今夜の舟出はよしな

さい、サ、よしなさい、よせてば、よせてばサ

ーサよせてばよ。

可愛いお方は千島の端に、わたしや古丹で血の
涙。

大島小島のあひ行く舟は、江差がよひかなつか
しや。

此の外十二三も聴いたが、残らざるぞが島の冷い悲調
であつた。二三十人も立聴きをしてゐたが、此の盲人

の見るから寂しい上に、「江差照るく箱館曇る」と低い寂しい冷い悲調で、歌つたり、吹いたりしてゐるのであるから、いづれも感に堪られないやうであつた。僕もこれにはヒドク打たれた。特に往々その民謡を断尾的に歌つたから、一層冷的哀感が深かつた。

詩集「金盃」を読んで、多少感ずる所があつたので、冷的趣味、冷的氣韻、冷的哀感のことを聊か述べて見た。

明治四十一年初夏

涼しき雨の日

林 外

柴 舟

春去にてよるに倦みたる生命の樹縁する日か清き風吹く

冷けきうれひとたかき喜びと伴ひて來ぬ北の國より

序

北と南とは美術に於いても文學に於いてもはた哲學に於いても殊なつてゐる南方の正を得たる者は溫潤和雅で其の偏なる者は輕佻浮薄である北方の正を得たる者は剛健爽直で其の偏なる者は齷齪強横であるのは此れ自然の理である北畫と南畫と露西亞文學と以太利文學とを對照すれば此の理は一目瞭然である。

我が文化は南方より開けて今やサガレンに及んでをる北海の拓地殖民事業は遅々として發達せぬが文藝の

進歩は更にまた甚だしい六七年前吾人が『北鳴新報』に據つて文藝を評論して以來文運や、見るべく文星も集つて來た佐藤松濤、小口紫水、野口雨情、安倍雨の舎等皆我が社の同人で露滴君の如も亦其の一遊星である。

君は『北鳴』を辭して後十勝の原野に放浪し久しく消息を絶つたが頃日突如上京して文學を廢し政治を學ぶ紀念として歌集『金盃』を公にするとして序を乞はれた今其の二三を閲するにアイヌと云ひ、メノユと云ひ、海霧と云ひ怒熊と云ひアツシと云ひ北方の風物を吟咏して都人士の夢想せぬ落想がある此れ歌壇の異彩とす

るに足る君は北海歌人の先驅として神代ながらの自然を咏じたものと評してよい而して君は又靈的方面を開拓して居る『金盃』一部汲めば盡せぬ味があつて雙が岡の法師も満足するであらう。

近頃文壇に自然主義が流行してツルゲネフが『親子』にかぶれて革命思想を鼓吹してゐるが北方文學の眞味は北海の自然と人情とに接せぬ者の理會し得る所ではない今の北方文學を唱道する者の如きはパロットでなければマウスバイブたるに過ぎぬ吾人は北海道よりして北方文學の正氣を得たる者が出で剛健爽直な思

潮を汪溢せしめてデカダン一派を沈黙せしむればよい
と惟ふ『金盃』を讀んで所感を記して露滴に送り以て
序と爲すのである。

六月十七日

梅澤和軒

露滴君の詩集を讀みて

薰園

北國きたくにの谿たににさくてふ鈴蘭の花しろく
と目に見ゆるかな。

露滴君に寄す

昨日友人から北海道に咲いたのだと云つて、鈴蘭（谷間の姫百合）の花を貰つた。友は説明して云ふ此の花の種は、もと外國人の牧師がゼルサレムから持つて來たんださうだと。その花は今僕の机の上に活けられて夢のやうな戀のやうな薫を漲らして居る。その机の上で僕は君の詩集を讀んだ。要するにこれは詩でも空想でもない。事實だ。しかし、僕は詩萬篇を贈るよりも、君にこの事實を報ずるのを喜ぶ。君も亦それを喜ぶだらう。

六月十四日

御 風

はしがき

敢えて世に値を問ふとでは無い。長い北海の旅から歸京するや、間も無く友等のすゝめもあつた。旁々ある記念にもと本集は編まれた。

題して「金盃」と云ふには故がある。故師萩廼家先生が尙ほ在らせられた頃、お伴をして三河島の喜樂園に菖蒲を賞した事があつた、其日、紫焼に御歌を親らしるし、寒山氏に焼かせた盃を、特に露滴にきて賜はつた、其御歌が即ち本集巻頭の

天地はわか身ひとつのこゝちせむ

このさかつきをさきに手にとれ

といふので、何時か詩集を公にすることもあつたら、以て序に代えよと、お言葉を添えられたのであつた。

本集載する所の落葉葵(短歌)、綠雲(短歌)、新春十勝原頭に立ちて

(長詩)、秋晚十勝河畔に立ちて(長詩)、街の夜雨(長詩)は共に皆北海道に在る中の吟味で、美籠(短歌)、氷目矢(短歌)に以前東都に在つた頃の作に係る、而して花ぐもり(短歌)一篇二十三首は、在北、在京を問はず、著者假りに女性と化りて歌つたものだ。

本集を公にするに就いて著者は、より以上、語るの要あるものを持たぬ。只、先盟諸氏の厚き同情に依つて、本集の巻頭華あるを得た事を、深く感謝して置きたい。

一體本集は、著者が病を得て岩佐病院入院中に出来あがつた。編輯から、校正まで、友時雨を煩はした事甚だ尠くない、併せて此處に感謝の意を表して置く。

四十一年六月

病院の窓に雨をきゝつ、

著者

金 盃 目 次

落葉突……………	(一)
美籠……………	(二)
花ぐもり……………	(七)
緑雲……………	(一五)
新春十勝原頭に立ちて……………	(三六)
秋晚十勝河畔に立ちて……………	(四〇)
街の夜雨……………	(四四)
氷目矢……………	(五二)

金盃

落葉羹

山本露滴著

よき人の髪かみの幾千いくちのゆらくごとみざり野
長し、暮夏ぼかのアイヌ地。

懸崖きりきしの崩雪なだれは海に湧く氷浪ひなみ煙に似たり、蝦え
夷冬まふゆの月。

深森みもり路を落葉おちば霏みぞれの遠樂とほがくや、住ままし人と、蝦え
夷まの晩秋ふゆあき。

丸木舟まきぶねして寒月さむつき冷ゆる湖うみの人、笛は死して
はまた冴えわたる。

軒滴のきたぢの秋行あきゆく音を數へつつ、詩集しふみを枕の蝦え
夷まの籠居こもりみ。

駒こまながらわが誦す歌の調まねて、あら啼く
森の蝦夷えまはことぎす。

十勝野としかちのや汽車は紺青こゝろあざの森に入り、夕鐘ゆふかね雲の
さかひゆもるる。

メ、ハ、コ、今禮してすぎぬ。駒ながらおぼつか
なげに見る晝の月。

十勝野は夜霧に咽ぶ熊笹の音をもきかる
る旅の宿かな。

十勝河、雪水あふれて日暮るれば、遠岸ゆア
イ、ヌの妻よぶ聲す。

釧路より海霧またもおそふらし、十勝燦陽
のかげくらいかな。

開墾地、凸所の雪に立てて手を鋏の柄にし
て見る夏の雲。

木皮衣きて丸木舟に立てばさみたるる、菱
の花咲く湖の夕べは。

湖面は霧す、霧より夢のごと、菱の實採りの
舟かへり來も。

風に假大幹はまれ枝舞へば怒熊背見する
大笹のうへ。

うつむけば碧流ひくし巖崖に熊の孤兒月
仰ぐかな。

すれくの木賊の中の露月や野駒夜啼き
ぬ蝦夷の古沼。

月ながら露こぼれたる隠沼の水輪に躍る
ヤマへの群や。

美 籠

さながらに吾や魔殿の鐵柱、夜ごと日ごと
を魔のゆきゝ見る。

死の洞に寂風ひくゝ迷ひ入る、ひゞきか遠
き冬枯野笛。

水凋れて骨のみ立てる冬林、震すぎがて暮
の鐘よぶ。

世の外よその毒どくきながるゝ川波かはなみのひゞきてか、
こや秋の鐘なる。

おろがみてあぐるにおもき額かぶかのいたみ、火
玉しばく、眼めを射りてゆく。

折りくは額に黄金の笞あてねくろがね
の矢は慣れていたまぬ。

寂凄の冷たき夜々のおもひ兒冬はたま
く産れけらしな。

狐火の森を縫ひつゝ走るごと、わが靈地に
ぞ罪に追はるゝ。

ほこらしの戀は孔雀の尾と垂れてうなぢ
幾度めぐりてきゆる。

天の河流光めぐれる玉御髮丈にこぼれて
ながるるや雲。

戀はこれ憶良の精か宵星か、歌みるごこに
彩まさりくる。

湧きかねて血潮や胸に泣きもせむ、小猫小
判かわれに戀の文。

その神代、神地をうめる八尋殿、右ゆ左ゆめ
ぐるさまか雲。

ゆくへ知らず、われとうかれて園さんぬ、招
かば地にくだらむもよし。

招かれてよればかいたきぬればぬる、影か
あらぬを世に得ば足らむ。

地に見ればことさらびたるふすぶりや、入
日まどはすうす晝の月。

風をりくほのかに琵琶の音もさこゆ温
明殿のありあけの月。

嫁ぎまして君は住まねど庭とへば紅梅う
つくし鶯なきぬ。

燃えぬればこそ冷やかに啼くならし、暗の
戸にきく山ほととぎす。

足そゞろ落花の雨に堪えじとやかたくな
なれどわが肩とらせ。

歌の會に夢の題えて昨宵のよき人と相見
し夢また辿る。

谷間を翹かろらかにおくへく鶯ゆきぬ
梅やあるらむ。

太陽はしたを彩雲夢と足をめぐる涯な天
なし地なしわが領。

「夢」はるか華やぐ美籠に地にくだし眠あま
きに酔はせよご宜る。

わが宮のさざはしまろび「詩」を落つる。下界
の雲に樂は奇しからむ。

からくと世を嘲笑らひ鬼と眠る。冥府に
して見る驕樂の夢。

花ぐもり

おもはゆの舞袖おもき殿の宴、笛の御座の
そむかれがちに。

ある時はなぶられたさにあらぬこと、云は
れてそむく我ならばとも。

よどみてはつぐべき言ことのふとなくて歌に
まぎらす宵もありしか。

なになうものたらぬかな影かげと影かげみ手は
握とらずてゆく花堤。

いとせちのものも云いかぬる添いひ歸り傘の
ひとつを花ぐもり雨。

怨みじてはそとふすぶりの宵の春し燭そくは牡丹
のくづるゝがごと。

隠こもり沼ぬまにこもりるせむと姫ひめ龍たつのはらばふこ
ともゆくわが情なさけ。

この思ひ今日こそは、としもおもひしがま
たさりげなく歌強いひまつる。

いつはつる夢かはしらぬたどり路の彩の
衣きて遠きを倦まず。

み枕布の内なるふちに名は縫ひぬ紅の糸
もて燃えよと少さう。

召されてはことさらさわぐ處女とる花
のこぼるる籠もてまゐる。

芳魂の麗日なれば漂ふと日記にしるして
経よむ夜かな。

わりなうて他し人への結納ごと椿をりを
り庭うつ夜なり。

さりとものかよわきのぞみ生命にて密雨
の夜を夢占はしむ。

君の人の笛のしらべのあひのよさ。ねたみに更くるこの朧宵。

今日もまた見よがせぶりの使ひ鳩、また桃雨をいづこへは去る。

添ひ寝ゆる御手に觸るゝ微響や、鬢のながらに耳うたがはる。

かた袖は春の雨こそ濡つなれ。繪にしてはしきおもひある日は。

妬ましう紋なすものか、寝くたれの髪のおあぶらをとかせば水の。

み頸をまいて明けたる朝なれば、針のおもたきもの倦んじかな。

あひ見たるほどの嬉しみある夜とてそら
怨じみぬはづれ枕に。

夢をこそ答えまつらむ。白絹のまくらに
じむしどろ紅見よ。

あかつきの怨じられぬるその家よ、青葉が
くれの山吹おほき。

緑 雲

紅萩の夕花見にといつはりて姉にわかれ
て來し燭の窓。

なになれば怨じられぬる夢は見し、雨窓燭
してふとのまろび寝。

寄ればよるちよとそれかねしすれあひの
わざとそむける頬に花の散る。

夕森ゆ久遠の鐘のしづむ湖、水棹たつれば
なくほととぎす。

逢ふ人はみかへらしむる面もなく、また逢
ふ人も傘とはなしに。

艶蓮の半座わかちて來ぬうらみかこつ愛
靈よ冥府の繪によき。

斷髮の無香の白衣のるならびて木の香に
あくる通夜の大殿。

天宮の天睡の君が御髪垂れ、あぶら薫ずる
よき緑雲。

呼ぶに名のおもひ出かねしすれあひの傘
と傘との間ぬふ螢。

枯骨の骨間ゆ、尺の葦折れて、巽鐘よぶ満洲
の冬。

新妻の二八の笑み頬花うけて艶雨こぼる
る春や歸り路。

そと觸ればうぶや風なき夕揺れて艶ひこ
ほるゝわが紫薇薔。

金簾を捲くや瓢鳴る音を先きに、わが夢殿
を秋訪ひて来る。

雨ぬふて夢なる鐘ぞまよひゆく、野の夕春
と戀はくるらし。

泉面いづつらに落露おちるかをる音ねにも似て衣音きねぬしな
く枕まくらにせまる。

地ちにしてはわれ等の歌うたのにほひより天あまは
み母ははの乳ちちになりし雲くも。

たまくあまに天路あまぢぬけこしわが靈たまの怪りなる
世人よひとの才はべにおののく。

あやまたで東ひむがしとをき人は病やまむ北きたゆながる
と矢やは見えざりし。

さながらの人の姿すがたとむつれてはわが靈たまよ
べも世よにかへり來きす。

あながちに怨うらみむにあらず泣なみけばたゞ悲かなし
きからに興おこもればゆる。

來む年をことしにかへて去年をまた今年
にかへて見ば足らむ宵。

ふとの目さめまたふと夢につゝく鏡夜ご
と朝ごと憎くもあらず。

集とづれば山吹ごしに人のあり、月ながら
ふる雨のあけ六つ。

なきにあらず、あれど光のかげくらし、まご
はぬ路と北をえらびぬ。

綿羊の和毛とわれの胸に入りて戀あると
きは冷あたゝむる。

天原のいちご爛れや花ふれば、亂鐘さゆる
冬の夜の街。

怨^{おん}髪^{はつ}の雨にうたるゝものあらむ、かゝれば
ぞともきかるゝ夜^よ鐘^{かね}。

おもかけよ艶^{はな}ひうせたる薄^{うす}髪^{がみ}にみだれ雨
する様にきほぬる。

蛇^{くらなひ}の軒^{のき}に下^{さが}れば五月^{さみ}雨^みす、瓦^{だれ}の屋根^{やまね}の故^{ふる}郷^{さと}
こひし。

ふるさこや半^{はん}ば崩^{くずれ}たる土^{つち}屏^{びん}の肩^{かた}こし柿^{かき}の
青^{あお}葉^は雨^{あめ}すも。

夢^{ゆめ}おふに森^{もり}こんりのいとぞよし、流^{なが}れな
かゆく廣^{ひろ}十^と勝^{かつ}野^のは。

みかへれば顧^{かへり}みの面^{おもて}ようつむきぬ、二十^{にじゅう}歳^{さい}
にちかき女^め夜^よの街^{まち}。

うぶらしう寡婦うつむく湯鏡の雫艶なる
板の間の朝。

すゝりなく子の戀おもひ涙しぬつれなかりける我はその夜に。

と思ひ自ら怨ず罪の子は夜々汝が夢のあ
るじなるらむ。

はつべうもあらぬ御怨こもる音のともき
く夜かな尼寺の鐘。

垂る乳ふくみ睡ればいたはる大自然詩歌
ほのかにわが夢まもる。

新春十勝原頭に立ちて

(某氏のものせる語に題す)

橋はし作つけし、道みちの一すぢ篠
涯はた遠とほみ、雪ゆきに起おこり、
雪ゆきに消きえたり。
森もりこそは、
ひとつあれ、
遠とほ方ちにうかびぬ。

たゞひと面おもてや、しろがねの、
眩くらゆき燦はな陽び垂たれ映はひて、
春はるよ、大おほ陸くが。
いま、紅べに靄りやぞ雪ゆきにもゆる、
さはれ、冷ひえ、
骨ほね徹とほす。
まつげも凍こる、
六十里むそ、われのみぞ、
旅りにして立つ十勝原

秋晚十勝河畔に立ちて

落日織照る十勝河
紅樹彩湧く兩林の、
散り浮く葉舟、靈誘ひ、
行くよ、ゆらく、詩の扉に！

ゆらぎ荒さの靈冷や、
穗彩の波の碧透さ。
縫繪浮くかも滑ら石。
とろろ、燕脂のしぶきする。

六十間の遠岸ゆ。
「暮」を案内の名なし鳥。
あれ、金銀の揉羽風。
舞へば紅葉のあられして。

燃ゆる緋うすれ、銀鼠の。
雲、今、森と際を無み。
浅宵寂びぬる氣の下り。
水上下流も暗青や、
「忘れじ夢の跡追はむ。
人の風情をさながらに、
みだれ葉縫ひて歸れ鳥。
と思へを揺らず、梢埒。

さくやぎ恍くる十勝河。
薫る廣野の草つゝみ。
コタン呑み來し大陸の。
暗の帳ぞ領しぬれ。

自註 コタンとはアイヌ語にて村落の意

街の夜雨

社の歸り、傘はあらぬを
インパネス被冠げる身なり。
待たるゝも見むもあらねば
かへり見の眼にいる街や
うつゝなの想ひを湧かす。
そを興にわれはたゝすむ。

肩埋めて木皮衣をくだる。

蓬髪を雨の雫す。

後姿の、モノユも行けり。

菰被ぎ駒の背ながら。

濡れつゝ、沈想める様に。

すれあひし人もありけり。

濡れ砂利をきしめく車。
とぼくの馬の足音や。
それもはや、仄に耀ひし。
暗の眼の彩角燈も。
横丁にそれぬる、今は。
街ながら人はあらざり。

み膝をし枕の人は。
華やぐを頬にや含む。
敗残の種族人は。
慈悲光の聖園にや趨る。
倦んじたる、あゝ、初閨の。
夢ならぬ夢も見あらむ。

種夢のかをりをつとむ。

蛀屋根はむせび音艶に。

暗内ゆ吾にぞほの寄る。

軒燈はをほりのはらと。

おとろへの雨街をぼかす。

三つ四つのーそれも消らぬる。

おもひよりさめたる眼して。

遠見れど直ぐなる廣路。

兩軒の幾十の遠方は。

ものあらぬやうにくろずみ。

「眠神」の奇しみ力に。

世はなべて覺ぞ無かる。

こゝはしも。大陸めける

ひろ原に、新なる街の

帯廣や。その大通り

九丁目ゆ東見たるー

春雨の夜の十二時。

吾はやがて戸をあけなまし。

氷 目 矢

〔讀古事記餘情百首の中〕

葦芽に身成りし神のみ伊吹氣を足ると三
千歳遅く靈眠る、

葦船の水蛭子に乗せて和田津見を無き罪
にしも漂よへる「愁」。

大母の病臥しますみしとねのにはひと誇
れ秋草の花。

匍匐ひて蛇蛙をば陸つれ取る醜女が假り
の情よ世の戀。

泣澤女神が夜となく晝となく海ゆ山より
泣き寄るや雨。

巖村の凝る血に生れし甕速日の神の血さ
らに産みし子か君。

御美豆良の湯津爪櫛よ戀の母齒とか御子
とか數添ふる歌。

最後に智賜ひし神の大穴牟遲兔なる身は
猶ほ慕ひよる。

赤猪如す火の大石の轉び墜つ響と鳴り來
魔の息か鐘。

大穴牟遲戀の怨恨の犠牲の神吾に似る憎
くし氷目矢に斃る。

些の目合羞らひ灑ふ須勢理毘賣色許男が
御手にまかれてぞ寝る。

蛇室に昨宵は、今宵は吳公室、いつまで似る
や神大穴牟遲。

わが胸は天の沼琴の樹に觸れていきどほ
ろしき地の動鳴や。

溪の闇鶉の夜啼の悲哀と冥府に迷ふやわ
が夢の靈。

男神、蓋結爲して御手と御手宇那賀氣理
弓ぞ造られし戀。

その神代天之羅摩船に歸りも來し少名毘
古那の丈こよき世か。

大手久岐し少名毘古那の神なれば小豆に
似たる世を世ご見る。

矢の穴ゆ衝返されし罪の矢ご歸りもなせ
そこの戀矢文。

鳴女貫きし矢の如天に迷へ靈罪としいは
・罪なるもよし。

吾は、歌は、碓女雀が白に好し、誦すに彩あり、
春くに米あり。

明治四十一年七月一日印刷
明治四十一年七月五日發行

發行者兼

東京市神田區錦町二丁目四番地

山本喜一郎

印刷者

東京市京橋區本湊町一號地

石田道三郎

印刷所

東京市京橋區本湊町一號地

中央印刷所

東京市小石川區小日向壘町二丁目廿六番地

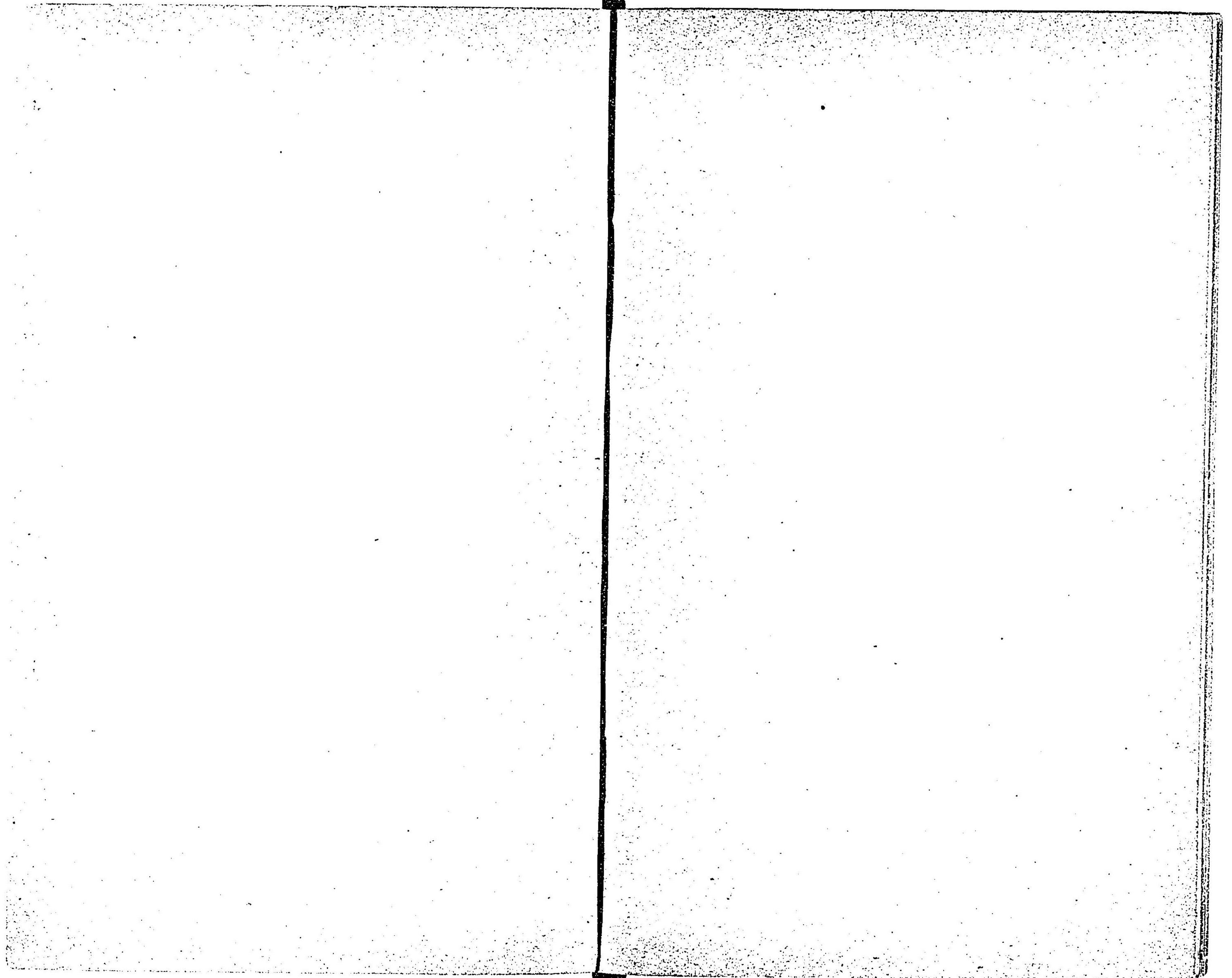
發行所

美術評論支社

東京市神田區神保町

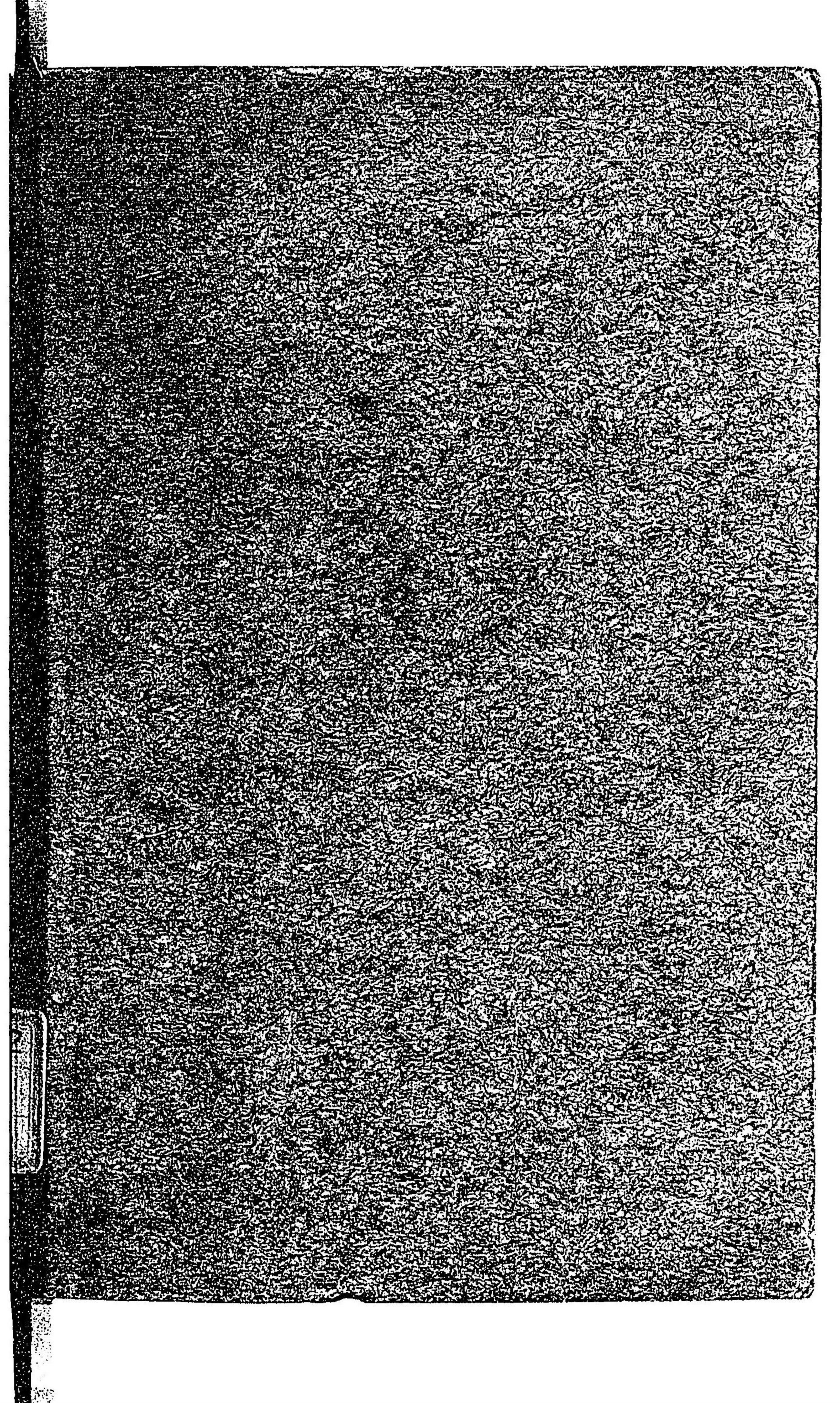
大賣捌所

東京堂



258

642



金盃

258
642

特

085871-000-7

特22-98

金盃

山本 露滴/著

M41

DBD-0440

